

『建礼門院右京大夫集』における平資盛の形象

Shape of Sukemori Taira in “Kenreimoninukyodaibusyu”

鈴木 茉莉子
Mariko Suzuki

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：右京大夫，資盛，星

Key words : Ukyodaibu, Sukemori, Star

1. 研究目的

『建礼門院右京大夫集』における平資盛の形象を明らかにする。そのために、資盛の命日である春という季節の位置づけを重視しながら、資盛が象徴的に描かれた章段である七夕歌群と雪の朝二場面との関わりの考察を軸として研究を進める。そして、現実を描く中に物語性・創造性を持つという視点から、題詠歌が主流の時代の中に誕生したこの家集の文学的意義を再検討する。

『建礼門院右京大夫集』は、歌集でありながら詞書の長さから日記的であること、源平争乱という激動の戦乱期の現実を描いていること、作者の宮仕えは短期間でありながらも、中心的な内容が宮仕え時代の思い出や恋人資盛への追憶であることに注目が集まり研究されてきた家集である。しかし、家集が纏められた時期と歌が詠まれた時期は諸説あるがほぼ不明であり、本文の内容から構想も研究されてきたが断定出来てはいないため更なる研究が必要だと考えられる。また、この家集の多くの主要人物が「月」や「花」と例えられている中で資盛はそうではないことに注目したい。資盛を「雪」に見ているとする先行研究は存在しており、卒論では七夕歌群において資盛と「彦星」を重ねている箇所があると見た。だが、資盛の命日である春にクローズアップした先行研究は見られない。家集から選出した春夏秋冬の歌と資盛を結び付けて考察している先行研究はあるが、家集の資盛を考える時、資盛に関する歌は一部ではなく全て取り上げるべきである。

この家集の七夕歌群では、七夕の逢瀬を「よそ」と詠むなど、作者自身の立場を第三者的目線で見るという姿勢が読み取れ、それは『後撰集』や『和泉式部日記』の第三者的目線、即ち物語描写と

指摘される点と通じると考えられる。また、『源氏物語』と類似した描写から事実をそのまま詠んだ歌ではないとする見解のある歌が存在し、更に、雪の朝の場面の一つには家集の記述と事実の矛盾が認められることから脚色が入っているとする見解があり、いずれも資盛に関する箇所である。これらから、資盛の描き方に対する創造性・物語性の可能性が感じられる。そこで本研究では、家集における資盛の捉え方と描き方の解明を試みることで、題詠歌が流行した当時ではあまり評価されなかったこの家集の、現実を描きながらも創造的で物語的、という側面から新たな文学的意義を見出したい。

2. 研究実施内容

『右京大夫集』と他の女流作品（『とはすがたり』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『和泉式部日記』『たまきはる』）との比較によって、『右京大夫集』の女流作品としての在り方を調査し、また、資盛の登場する他作品（『平家物語』『愚管抄』『源平盛衰記』『高倉院巖島御幸記』『平家公達草紙』『愚管抄』『玉葉』『吾妻鏡』『安元御賀日記』）との比較によって、『右京大夫集』における資盛の描写の在り方を調査した。

そして、先行研究の調査に加えて、それら他作品との比較によって見出した『右京大夫集』において資盛の形象に特に関わると考えられる歌語・景物（「雪」「雪の朝」「雪のあけぼの」「朝顔」「有明」「星」「夕日」「夕暮れ」「紅」「縹」）・色（縹・紅・白）・季節（冬）の先例・同時代の在り方を国歌大観・書籍で調査することによって、『右京大夫集』におけるそれら歌語・景物・色・季節の在り方の独自性を見出すことを試みた。

また、それら歌語・景物・色を総括的に捉えた時の繋がり・枠組みを、作品に何度か登場する「五節」という行事を手がかりにして、右京大夫の恋情としての「紅」、資盛を象徴するものとしての「白」「縹」という、色を中心とした大まかな自分なりの位置づけで捉えてみた。

なお、「雪」「朝顔」「星」については「白」という色が共通項として存在し、「縹」という色が関わっていると捉え、『右京大夫集』において「雪」が登場する場面全てと、「朝顔」が登場する場面と、七夕ではない「星」が登場する場面を取り上げ、これらの繋がりを分析して一度文章として纏めた。

3. まとめと今後の課題

現状としては、他作品・先行研究の調査によって『右京大夫集』における資盛の形象に関わるキーワードを見出し、そこから資盛を形象する上で右京大夫の意識、即ち全体的な枠組みを捉えた、というところである。

しかし、現段階では論じるための根拠がまだ弱

く、仮説の段階に過ぎないため、注目した歌語・景物一つ一つの先例・他作品での在り方の更なる調査と分析をし、その在り方がどの程度『右京大夫集』に影響しているか、そこから『右京大夫集』の独自性は見出せるのか、という点を絞っていくのが課題である。

また、資盛への想いが強く出ていると考えられる七夕歌群についても、歌語の分析という点ではまだ不十分である。具体的には、牽牛織女を表す言葉（「たなばた」「たなばたつめ」「星」「二つの星」「天の羽衣」「彦星」）の使い分けに意図はあるのか、そして、それが資盛の形象にどの程度影響しているのかという点を、やはり先例・同時代和歌での在り方と『右京大夫集』での在り方を比較することによってより深く分析する必要がある。

加えて、資盛の命日の季節である春にも注目すべきだと考えていたが、注目した歌語・景物の分析と並行して季節に焦点を置いて作品を分析し、注目点と季節に関係性があるかどうかを調査することも課題である。